

「病者のこころの動き」

都 留 春 夫 著

本書は、教育者であり、また看護教育にもたずさわっておられる著者が、実際に自分で体験したことを基礎として、病者のこころの動きを、克明にとらえ、分析したものであり、病者に接する者に必要な心がまえを、厳しく究明している。

内容は、Ⅰ. 病気との出会い、Ⅱ. 病者をめぐる環境と人々、Ⅲ. 病者のこころへの接近、の3項からなっており、Ⅰ項では、著者の病者としての体験が記されている。Ⅱ項では、患者、病者、健康者、病院について、著者の体験の分析をはさみながら説明し、考えが述べられており、そして、医療関係の専門家が、患者のためにするすべての行為も、患者自身のいのちのいとなみを力づけ、支え、手助けになるだけであるということと、そしてその援助行為は、適時に、適切に、適度になされなければならない、ということ強調している。

Ⅲ項では、さらに、病者のこころを一般的な形で整理している。そして、その病者のニーズにあわせて援助していく専門家としては、まず、その人を知り、人間を理

解する必要がある。「人を知る」すなわち「病気」ではなく「病んでいる人」を人間として知ることはきわめて大事なことでありと強調している。そして、援助という仕事は、人と人とのまわりの中で行われるものであるので、援助が人間的な意味での支えになるには、こころの交流が大きな役割をする。このまじわりは、相手を客観的に理解し、処置の対象としてのみ取り扱うようなまじわりではなく、お互いの間に、こころの往き来のあるような対人関係、すなわち、対人理解でなければならないと主張している。

読んでみると確かにもっともなことで、我々医療専門家としては、常に念頭においていることではあるが、患者すなわち、生きている人間を、真に理解し、実践することは、非常にむずかしいことである。そのためにも、この種の書を時々読み返すことは、よりよい実践のために非常に大切なことだと思う。

(A 5, 頁 142, 1975, ¥ 1300, 医学書院刊)

(福屋靖子)

「だれにもできる手作りの 陶芸入門」

村 木 朝 司 著

我々セラピストが、治療手段として作業療法に活用している作業には数多くの種目があるが、そのなかでも陶芸は最も利用範囲の広い種目のうちの一つではなからうか。

しかしながら患者もセラピストも、「見たり、聞いたり」までは誰でも再三経験しているだろうが、「試したり」となると設備や材料の準備等が大変と、つい億劫となって実行しにくいのが「本音」ではなからうか。

本書は、簡単な準備で家庭でも楽しめる手作りの陶芸から始まり、その基本技術のすべてから焼き方まで、ひと目でわかる写真構成で編集されており、カラー口絵で作品を豊富に紹介し、その一つ一つについて作り方を詳しくわかりやすく教えている。

本書を手に入れば自分も何か作陶したくなるような気分させてくれるので、患者と共に読めばより治療的に

も有意なものがあると思う。

本書の主要内容は、焼物のできあがるまで、焼物と土、道具、手作りの基本的技術（手びねり、紐作り、板づくり、型作り）、石膏型の作り方、ロクロの技術（抹茶茶碗の作り方、つぼの作り方）、表面装飾（櫛目、刷毛目、押型、彫刻等）、花印の作り方、乾燥、素焼、下絵付け、上絵付け、釉薬と釉掛け、本焼き（窯詰め、温度の測り方）、窯の種類（登窯、電気窯、都市およびプロパンガス窯、灯油窯）その他について、すべて写真や図解入りで懇切丁寧に説明されている。

さらに巻末で、全国各地の窯場案内、陶芸材料購入先一覧、陶芸教室一覧を掲載しているので設備材料を準備するにも便利な書である。

(主婦と生活社刊, P 111, ¥ 780)

(三重県立高茶屋病院, 作業療法士 大橋 博)